【絶句ー四季】

春暁

孟浩然

作者

孟浩然

六八九年〜七四〇年。盛唐の詩人。字も浩然。襄州襄陽の人。若い頃は何度か科挙に応じたが全て落第し、諸国を放浪して帰郷、襄陽郊外の鹿門山に隠棲した。四十歳のとき、都へ出て名士の家に出入りし、張九齢・王維らと交わった。この頃、王維の仲介によって玄宗皇帝にまみえたが、玄宗に献上した詩の言葉が不興を買い、仕官することができなかったという。その後、また郷里に戻り、張九齢が荊州刺史に左遷されると、その従事となるが、ほどなくして辞任した。江南を放浪して再び帰郷して隠棲するが、背中のできものがもとで死んだという。自然詩を得意とし、東晋の陶淵明の風をついで、自然の中での暮らしを明朗に描いている。王維らと共に「王孟韋柳」と称され、李白・王昌齢らとも交わりがあった。文集に「孟襄陽集」がある。

出典

唐詩選

七巻。明の李攀竜が編集したとされる唐詩の選集。唐詩四百六十五首を詩体別に編集したもの。李攀竜（一五一四年〜一五七〇年）は、字は于鱗、号は滄溟。山東省済南の人。明代中期以降の文壇の主流となった「嘉靖七子」（「後七子」とも呼ぶ）の中心人物。詩の価値を決定するのは「格調」（詩文の風格と調子。詩形・リズム・修辞などを通じて、詩の外に現れるおもむき）であるとし、格調の最も高いものとして盛唐の詩、ことに杜甫・李白を評価し、「文は秦漢、詩は盛唐」という主張をした。その主張に沿って、盛唐を中心とした唐詩の選集「唐詩選」が刊行された。「唐詩選」は、五言古詩十四首、七言古詩三十二首、五言律詩六十七首、五言排律四十首、七言律詩七十三首、五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首、計四百六十五首からなる唐詩の選集である。作家の数は、合わせて百二十八人。最も多く作品を選ばれているのは杜甫で、五十一首。以下、李白三十三首、王維三十一首、岑参二十八首と、いずれも盛唐の詩人である。中・晩唐詩は格調が低いとして極端に冷遇され、白居易・杜牧にいたっては一首もとられていない。選ばれた作品は、雄渾にして壮大なものが多く、明・清代の中国や江戸時代の日本に大きな影響力を持った。ただし、「唐詩選」は偽書で、李攀竜が歴代の詩を選んで編集した「古今詩刪」から唐代の一部分を抜き出して出版したものである、等という説もある。そうであるとしても編者は同じであり、李攀竜の説に沿った、手頃で優れた唐詩の選集として評価され、現在も愛読されている。「春暁」は巻六所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐詩選」（目加田誠著）によった。

主題

春の心地よい眠りからふと目覚めた私は、昨夜の雨風を思い出し、散った花のことを思いやる。

構成

第一（起）・二（承）句…深い眠りから目覚めると、鳥の声が聞こえてくる。（現在・事実）
第三（転）句…昨夜は雨風が強かった（ことを思い出す）。（過去・回想）
第四（結）句…花はどれほど散ったのか（と心配する）。（現在・心情）
〈詩形・押韻〉 詩形―五言絶句。　押韻―「暁」（第一句）・「鳥」（第二句）・「少」（第四句）。上声十七篠韻。（ただし、「暁」は、漢音ケウ。ゲウは、慣用音。）

訓読と現代語訳

①春眠　暁を覚えず
②処処　啼鳥を聞く
③夜来　風雨の声
④花落つること　知る多少

① 春の眠りは心地よく、夜が明けたことさえ気づかなかった。
② ふと目覚めると、あちらこちらで鳥の鳴き声が聞こえてくる。
③ 思えば、昨夜は雨風の音が強かった。
④ 花は、いったいどれほど散ってしまったことだろうか。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 漢詩の決まりについて、理解する。

❷ 唐代の文化について知っていることを発表する。その後、指導者の説明を聞く。

❶P一五六～一五七「漢詩の手引き」を利用する。小・中学校で学んだ初歩的知識を整理する。詩形・押韻程度にとどめ、声調や平仄（ひょうそく）については、専門的になるので、指摘するのみとしたほうがよい。

❷小・中学校で学習した知識を発表させる等して、唐詩学習の動機付けとする。指導者は、唐詩が、漢詩の全盛時代・黄金時代といわれるほど、盛んであったことを説明する。

唐王朝が南北朝の分裂時代を終わらせ、当時における世界最大級の大帝国を築いたこと、シルク・ロードを中心とする国際国家だったことを示す。その大帝国を治めるため進んだ官僚機構を作り、官僚になるための試験「科挙」の制度が整えられ、その試験科目に詩作が課せられ、唐詩の隆盛を招いたことを理解する。

唐代の文化を学ぶため、日本は「遣唐使」を派遣したこと、奈良時代の文化は唐文化の圧倒的影響下にあったこと等を指摘する。

■展開

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。知技(1)イ・ウ〔「言葉と表現」1〕
❺詩の場面展開を整理する。
❻優れた表現を指摘し、第四句を中心に作者の心情を考える。
❼詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶「啼鳥（ていちょう）」の歴史的仮名遣いに注意させる。詩の教材であるから、ことに音の持つ意味が大きいので、範読は丁寧に、ゆっくりと読むようにする。

❷きちんと声を出して丁寧に読むよう指示する。

❸書き下し文にさせ、二、三名の生徒に板書をさせる。

【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。以下、全ての詩に共通する。

❹「処処」「夜来」など、読み方と意味を確認させる。「多少」は疑問形であることに注意させ、一応の訳を作らせる。漢和辞典で語意を確かめてから訳すよう指導する。前半二句と後半二句に分けて、指名した生徒に訳を発表させる。誤りを正して訳を完成させる。

【評価】同音異義語の意味の違いを調べ、現代語訳に反映できているか、確認する。

❺「構成」参照。

❻生徒の側から、優れた表現と考えられるところを指摘させる。指導者の側から示してもよい。作者の自然への愛情、自然の中で生きる自由な心情を理解する。

❼詩形・押韻については、最初の作品であり、生徒も慣れていないので、質問して答えさせるのが難しそうであれば、指導者が説明してしまってもよい。

発問例

●一四八ページ

問　**「不レ覚レ暁」（第一句）とは具体的にどういうことか。**

答　夜が明けたことにも気がつかない。

補　「覚」の意味を正確に理解させる。そのため、漢和辞典を引いて調べるよう指示してもよい。「覚」を「おぼユ」と訓読するために、「おぼえる・記憶する」などと取り違えることがある。「覚」が、「気づく・感じる」意であることを理解させ、なおかつ、訓読と訳との間には距離があることを指摘しておく。

問　**「処処聞二啼鳥一」（第二句）について、**

「処処」とはどのような意味か。

[2] [1]

[中][A]「聞二啼鳥一」とあるが、作者はどこで聞いているか。

[易][B]「聞二啼鳥一」とあるが、作者はどこで聞いているのか、適切なものを次の中から選べ。

(ア)朝の庭で
(イ)夜の床の中で
(ウ)朝の床の中で
(エ)朝の書斎で読書をしながら

答　[1]あちらこちらで
[2][A]朝の床の中で

問　**第二句（承句）で、作者はどのような朝の情景を想像しているか。**

[B](ウ)

答　ふと目覚めると鳥のさえずりがあちらこちらで聞こえ、もう夜が明けていることを感知している。同時に、平和な鳥の鳴き声から、穏やかに晴れ上がっていることを想像している。

問　**「風雨声」（第三句）を聞いて、作者はどのようなことを心配しているのか。**

答　花はどれほど散っただろうか、ということ。

問　**「花落（ルコト）知多少」（第四句）とはどのような意味か。**

答　花はどれほど散っただろうか。

問　**この詩に歌われた心情として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)春のけだるさを厭う情。
(イ)落花を楽しむ情。
(ウ)春の鳥を悲しむ情。
(エ)落花を惜しむ情。

答　(エ)

問　**作者の自然への愛情が最もにじみ出ているのは、どの部分か。**

答　後半の二句。特に第四句（結句）。

補　鳥の声を聞いて、穏やかな朝の訪れを感じた作者は、しかし逆に昨夜の風雨のことを思い出し、花がたくさん散ってしまったの

語句の研究

●一四八ページ

4春眠　春の眠り。春の心地よい眠り。

4不レ覚レ暁　夜が明けたのにも気がつかない。「覚」は、感じる、気づく。「暁」は、明け方。夜明け。

5処処　あちらこちらで。

5聞　きこえる。（無意識のうちに）きこえてくる。「聴」が、（意識して）きく、の意であるのに対して、「聞」は、（意識していないのに）きこえる意である。

5啼鳥　鳥の鳴き声。また、鳴いている鳥。ここでは前者。「啼」は、声を張り上げて鳴く意。

6夜来　昨夜。「来」は、ここでは時間を表す語に付き、「おおよそその頃」の意を表す助字。また「来」は、ある時点から一定の時間がたつ意とも考えられる。その場合、「夜来」は、昨夜から（今朝まで）の意。

6風雨声　雨風の音。「声」は、音。

7花落知多少　花は、いったいどれほど散ってしまったことだろうか。さぞ多いことだろう。「多少」は、「いったいどれほど…だろうか」の意を表す疑問詞。疑問詞の上に

ではないかと心配する。そこに自然への思いやりがにじみ出ている。同時に、その自然の中で毎日を生きる自分の日々の暮らしを、肯定的に捉え返している。自然に抱かれる暮らし方に、充実感を感じている。

問 ◉ **作者は、この詩をどのような状態でいるときに詠んだのか。**

答 春の明け方（春暁）の心地よい眠り（春眠）に夜が明けたのも気がつかない状態でいるとき。

補 「詠んだのか」という問いであるが、「その感興を得たのはいつか」と置き換えて考える点に留意する。「詩を詠む」という行為が、即座に文字に書き付けるという単純な過程ではなく、素材に出会い詩心が刺激される点から発するものであることを考えるのもよい。具体的には「寝床にいる状態」といった答えも可能だが、作品表現の読解に即して考えることが鑑賞に生かされることも意識させたい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

補 「韻」とは、「ひびき」の意であり、ひびきの同じ文字を決まった位置に置くことを「押韻」（韻を押す）という。「韻」は「脚韻」ともいい、「押韻」は、別に「韻を踏む」ともいう。以上のような事項を簡単に整理してもよい。

鑑賞

孟浩然は、生涯のほとんどを隠棲して過ごした。彼はその生涯を通じて、官僚として出世することだけが価値のある生き方ではなく、自然の中で自由に生きる生き方にも深い意味があることを詩中に描き出した。「春暁」詩でも「春眠不レ覚レ暁ヲ」と述べているが、それは隠棲する者の自由さと喜びを表現した言葉でもある。古代の朝廷は、夜明けとともに開かれた。そのため官僚は、夜明け前の暗い時間に家を出て出勤しなければならなかった。初唐の宰相だった上官儀に「入レ朝洛堤歩レ月ニ」という詩があり、宰相でさえ月の光を浴びながら朝廷に赴いたことが分かる。だが、隠棲して生きる者には、そのような束縛はなく、自分の時間を自由に使うこと、心地よい春の眠りを楽しむことができた。その心のゆとりから、花が散ったことに心を向けることもできた。「春暁」詩は、そのような生き方の豊かさを描いた詩でもある。

なお、「知多少」については、「きっと多いであろう」とする説もある。「どれほどだろうか」と解釈する場合でも、その多さを想定しての疑問なので、詩意は大きく変わらないが、「江南春」にも「多少」の語があり、そこでは「多くの」の意味であることには注意が必要である。「校注唐詩解釈辞典」（松浦友久、大修館書店、昭六二）参照。

「知」が来た場合、疑問の意味を明示して、「いったい…か」という気持ちを表す。その場合、訓読では「知レ…」（知んぬ…）とすることが多いが、教科書では簡潔と平易を重んじて「知レ…」（知る…）とした。「花」は桃の花と思われる。

参考「春あけぼの」　作者は土岐善麿。明治十八（一八八五）年～昭和五十五（一九八〇）年。日本の歌人・国語学者。本教科書は、『鶯の卵　新訳中国詩選』（筑摩叢書、一九八五年）によった。

江南春

杜牧

作者

杜牧

八〇三年～八五三年。晩唐の詩人。字は牧之。号は樊川。京兆万年（陝西省西安市）の人。祖父の杜佑は、徳宗・順宗・憲宗の三代に仕えた宰相で、「通典」の編者としても知られている。大和二（八二八）年、進士に及第し、弘文館校書郎などに任ぜられた。江西観察使沈伝師に招かれ、その従事・試大理評事となって洪州（江西省南昌市）などに赴いた。大和七（八三三）年、淮南節度使牛僧孺の招きによって、節度推官・監察御史裏行として揚州（江蘇省揚州市）に赴任した。大和九（八三五）年、監察御史に任ぜられ洛陽に分司（唐は長安・洛陽の二首都体制だったので、中央官は両首都に分属させられた）したが、弟の顗の病気のため辞職。再び地方官に出た後、開成四（八三九）年、左補闕・史館修撰として都に戻り、また黄州（湖北省）・池州（安徽省）・睦州（浙江省）の刺史を歴任した。大中二（八四八）年、司勲員外郎・史館修撰となり、吏部員外郎に転じたが、弟の病気のために生活が苦しく、収入の多い湖州（浙江省）刺史に転出。一年後には、考功郎中・知制誥として都に戻り、大中六（八五二）年、中書舎人に移って没した。剛直な性格で、国家の大事を論じてたびたび上奏した。反面、美男で歌舞を愛し、風流才子として有名だった。詩においては、豪邁で艶麗という矛盾する両面を持ちつつ、七言絶句に優れ、清新・華麗な作を多く残した。盛唐の杜甫を「老杜」と呼ぶのに対して「小杜」と呼ばれ、李商隠と共に「李杜」と並称される。文集に「樊川集」がある。

出典

三体詩

六巻。南宋の周弼の編。唐の詩人百六十七人の近体詩を、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三体に分類して収めている。中晩唐を重視して初唐はとらず、盛唐も李白・杜甫をとっていない。元の釈円至が初めて注をほどこし、「箋注唐賢絶句三体詩法」二十巻を作ったが、のち清の高士奇が補注を作った。我が国には南北朝時代に、中巌が入唐して伝えたといわれる。その後、禅僧の間で盛行し、注が多く作られた。江戸時代、一部の学者がこれを排斥したが、愛読者が多く、現在に至っている。「江南春」は巻一所収。本教科書は、冨山房「漢文大系　箋解古文真宝後集・増註三体詩・箋解唐詩選」によった。

主題

広々とした江南の春景色の中に風が吹き過ぎてゆくとき、かつてこの地に栄えた南朝の寺々の雨に煙る姿が思い浮かぶ。

構成

第一（起）・第二（承）句…晴天の景色。色彩豊かで広々とした光景を、鮮明に描いている。
第三（転）・第四（結）句…雨中の景色。色彩のない墨絵のような世界を、幻想的に描いている。
〈詩形・押韻〉 詩形―七言絶句。 押韻―「紅」（第一句）、「風」（第二句）、「中」（第四句）。上平声一・東韻。

訓読と現代語訳

①千里鶯啼きて　緑　紅に映ず
②水村山郭　酒旗の風
③南朝四百　八十寺
④多少の楼台　煙雨の中

① 見渡す限りの春景色の中に鶯が鳴きかわし、木々の緑と花々の紅が、鮮やかに照り映える。
② 水辺の村、山辺の町、酒家の旗が風に揺れる。
③ 江南の地には、滅び去った南朝の四百八十もの寺々があったが、
④ そのたくさんの高楼が、煙る霧雨の中に立ち並ぶ。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 前半の叙景の美しさについて理解する。
❻ 後半の転調の大胆さについて理解し、情景について討論する。
❼ 詩形・押韻について確認する。〔**学習のポイント**」1〕

❶最初の七言絶句である。七言絶句は流麗な調子を持ち、原詩の中国音はリズミカルだが、訓読をしてもその調子のよさが伝わる。ことにこの詩は音読みの部分が多く、原音の調子のよさが感じ取れるので、一層訓読を重視したい。

❷その際、各句の大きな切れ目が次のようであることに注意させる。
（起句）「千里／鶯啼／緑映レ紅」、（承句）「水村／山郭／酒旗風」
（転句）「南朝／四百八十寺」、（結句）「多少楼台／煙雨中」

❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。

❹「千里」「啼」「映」「楼台」などの語を指定して漢和辞典を引かせ、各自に現代語訳をノートに記させる。

❺・視界の広さに気付かせる。―「千里」「水村」「山郭」等の語を通じて、広々とした空間を見ていることに注意する。
・色彩の豊かさを理解する。―「緑映レ紅」という表現から、光に満ちた空間であることを理解する。
・空気のさわやかさに気付かせる。―第一句の光の感覚から、空気の透明さは十分に伝わるが、第二句の「酒旗風」という「風」の吹き渡る情景によって、そのさわやかさがより強く伝わってくる。

❻・過去の時間への追憶が現れてくることに注意する。―「南朝」は三百年にわたって江南の地に栄えて滅んだ王朝であり、その昔の栄光と滅亡への追懐が突然に浮かんでいることに注意する。
・雨中の景色になっていることに注意する。―「煙雨中」という表現から明らかであるが、後半が追懐と雨に特徴を持つ表現であることに注目させる。この雨中の景は、想像なのか現実なのか、生徒に討論させたい。

❼七言絶句形式は初出なので、同形式について確認する。

発問例

● 一四八ページ

問　前半二句の中から、視界の広さを表している語句を抜き出せ。

答　「千里」「水村」「山郭」など。

補　「緑映レ紅」なども指摘できよう。空間の広さのみでなく、空気の透明感、光の豊かさなども感じられる表現であることにも注意。

問　第二句の表現は、具体的にどのような情景か。

答　水辺の村や山辺の町など、あちこちに酒家の旗が風に揺れている。

補　右の答えは一例である。水辺の村、山辺の町を風が吹きぬけて、いま私のいる酒家の旗を揺らす等の解釈もあり得る。この句全体が「水村」「山郭」「酒旗風」という名詞の羅列なので、情景はさまざまに解し得る。多様な解釈を許容し得るところなので、生徒からさまざまな発言を期待できる。

問　後半二句の表現の特徴を挙げよ。

答　第三句―「南朝」という、過去に滅んだ王朝が突然出てきて、時間（過去）が詩の中に現れる。
第四句―「煙雨中」という言葉から、今まで晴天の表現だったのに、雨中の景に変わっている。またそれと合わせて、色彩を都とした宋・斉・梁・陳の四代の王朝をいう。広くは、その前の呉・東晋を加えた六代の王朝をいう。杜牧は、おそらく、呉以来の六代の王朝、いわゆる「六朝」を想起していたものと考えられる。「六朝」は、三世紀から六世紀末まで、建康を都として江南を支配した六つの王朝で、北方を支配した「北朝」に対して「南朝」とも呼ばれた。「北朝」が、黄河流域の中原を支配した異民族の王朝だったのに対し、「南朝」は中原を追われた漢民族の王朝で、文化的優越性を誇ったが、最後は北朝の隋によって滅ぼされた。事実、南朝は経済的、文化的には繁栄し、この時代の文学・芸術は、南朝の建康を中心としていたといえる。仏教信仰が広がり、各地に寺院が建立され、ことに首都建康とその周辺には壮麗な伽藍が甍を並べていた。「南朝」という語には、そうした栄華の輝きと、滅亡の悲哀の両方が感じられる。

10 四百八十寺　四百八十もの寺々。南朝の都とその周りには多くの寺院があったが、それをいっている。「四百八十」は、実数ではなく、数多いことを実感させるための表現。当時このように言う決まり文句があっ

語句の研究

● 一四八ページ

8 江南　長江下流の南岸一帯。

8 江南春　江南の春景色。江南の地の春の風景を詩題としたもの。詩題を「江南春絶句」としているテキストもある。

9 千里　千里四方の意。「千里」は、ここでは、長さ・距離ではない。広々とした空間をいう。見渡す限り。

9 緑映レ紅　木々の緑と花の紅の色が照り映えている。「緑」は、樹木の葉の緑色。「紅」は、桃などの春の花の紅色。「映」は、それぞれの色が光に輝き、互いに引き立て合うこと。

9 水村　水辺の村。

9 山郭　山辺の町。「郭」は、城壁の意。町を囲む二重の城壁の内側を「城」、外側を「郭」という。ただし、必ずしも厳密に区分して用いられるわけではなく、「城」も「郭」も、城壁の意で用いられることも多い。そこから、「郭」で、（城壁に囲まれた）町を指す。

9 酒旗　居酒屋の目印の旗。

10 南朝　江南の建康（現在の江蘇省南京市）

のない、水墨画のような世界になっている。

後半二句全体として、過去への追憶を込めた、幻想的な表現となっている。

問 **前半二句は晴れていて、後半二句は雨の景色となっているが、それをどう理解したらよいか。**

答 ①時間がたって雨が降ってきた、②晴れの景色と雨の景色を並列して描き、「江南春」という題名のイメージを両面から表現した、③前半二句の晴れた現在の景を描いているうちに、過去の南朝の美しい寺院の雨中の姿を幻想した等、答えはさまざまにあり得る。

杜牧が、晩唐の詩人として、リアリズムの作風から離れてしまっていることを考えると、③の答えが比較的によいと思われるが、正解を強制せず、むしろ生徒の自由な発言を積極的に引き出したい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

たとも考えられる。なお「四百八十寺」は「しひゃくはっしんじ」と読んでいる。「十」は「じゅう（ジフ）」と入声（仄声の一つで、最後に子音のつく、つまった音）で読むと、平仄（平らな音と仄いた音を秩序正しく配置する韻律上の規則）が合わなくなるので、「しん」という平声の音で読んだもの。

10 多少　ここでは「多くの・たくさんの」の意。「多少」は、「どれほどか」の意を示す疑問詞として用いられるのが普通の用法である。そこから、漠然と「多くの」の意を表す用法が生じた。

10 楼台　たかどの。二階建て以上の高い建物や見晴らし台。ここでは、仏寺の何層にもなった高い建物。塔や仏殿を指している。

10 煙雨　煙るように降る雨。霧雨。

鑑賞

この七言絶句については、その絵画的描写を支える句法にも注目しておきたい。起句は、まず「千里」という空間を設定し、そこに「鶯鳴」「緑映紅」のように鳥の鳴き声と春の植物の鮮やかさを聴覚と視覚の対比によって位置づけた後は、動詞をいっさい使わずに句を構成する。承句の「水村」と「山郭」の対比、そしていずれにも翻る「酒旗風」という描写は、全体として起句の自然物に対して土地に住む人々の営みを示す句となっている。形式的には対句ではないが、対偶の技法によって句が組み立てられていることには注意したい。

そのように立体的で鮮やかな前半に対して、転句と結句は二句貫かれて読まれることで、「南朝」の繁栄すべてが「煙雨中」に収斂する効果を生む。「煙雨」は、たとえば隋の煬帝の「望二江南一（江南を望む）」に「煙雨更相宜（煙雨更も相い宜し）」という句があるように、江南を象徴する情景でもあり、その意味で、実景としての「煙雨」であることと、おぼろげな過去を「煙雨」というヴェールに包まれたものと比喩することとは、二者択一的ではなく、むしろその重ね合わせが詩情を高めている。

ここには、江南の土地が晴雨を行き来しつつ春を過ごしていくことと、いつの時代でも変わらない自然や生活と栄枯盛衰の歴史とを詩人の視線が往復しながら旅をしていることが、並行して描かれているようである。したがって、前半と後半は、むしろ循環するものとして読むほうが、この詩がなぜ絵画的印象を与えるのか、理解しやすいのではないだろうか。

秋風引

劉　禹錫

作者

劉禹錫

七七二年～八四二年。中唐の詩人。字は夢得。中山（河北省定県）の人。一説に、彭城（江蘇省徐州市）の人。貞元九（七九三）年、柳宗元と共に進士に及第。監察御史になり、柳宗元と同じく王叔文の改革派に属した。積極的に政治改革に参加したが、順宗の永貞元（八〇五）年、反改革派のクーデターによって王叔文が失脚すると、連州（広東省連県）の刺史に左遷され、さらに朗州（湖南省常徳県）の司馬に貶された。のち連州の刺史に改められ、各地を転任し、文宗の太和二（八二八）年、主客郎中として都に戻る。中央と地方の官を歴任し、太子賓客・検校礼部尚書となって没した。死後、兵部尚書を追贈された。晩年には白居易と親しく交わり、唱和の詩も多く残されている。力強く気骨のある詩風で知られるが、静かで鋭敏な心情を表現した作も多い。白居易によって「詩豪」（詩の世界の豪傑）と称された。

出典

唐詩選

「春暁」の「出典」参照。「秋風引」は巻六所収。

主題

どこからか秋風が吹いてきたが、その寂しい風音を誰よりも先に聞きつけたのは、独りぼっちの旅人である私だった。孤独な境遇の中で季節の移ろいに敏感になった心を描く。

構成

第一（起）句…秋風が吹いてきた事実を提示する。
第二（承）句…具体的な情景を述べる。
第三（転）句…秋風が今朝から庭の木を鳴らしていたと、過去の事実に目を転じる。
第四（結）句…木に鳴る風音に最初に気づいたのは私だったことを述べる。
〈詩形・押韻〉　詩形―五言絶句。　押韻―「群」（第二句）・「聞」（第四句）。上平声十二・文韻。

訓読と現代語訳

①何れの処よりか　秋風　至る
②蕭蕭として　雁群を送る
③朝来　庭樹に入り
④孤客　最も先に聞く

① いったい　どこから、秋風は吹いてくるのか。
② 物寂しい音をたてて、雁の群れを送ってくる。
③ この秋風は　今朝がた庭の木に吹き入ってきたが、
④ 独りぼっちの旅人である私が、その音を　誰よりも先に聞きつけた。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。
❺「入二庭樹一」の主語について考える。
❻「孤客最先聞」の理由について考える。
❼詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶詩の教材であるから、ことに音の持つ意味が大きいので、範読は丁寧に、ゆっくりと読むようにする。
❷「秋風」「何（いづレノ）」「蕭蕭（せうせう）」など、歴史的仮名遣いに注意させる。また「朝来（てうらい）」「孤客（こかく）」など、漢和辞典を引いて、読み方と意味を確認させる。内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹「何処」は疑問形であることを指摘し、また「蕭蕭」が擬態語（擬音語）であることに注意させ、一応の訳を作らせる。漢和辞典を引いて語意を確かめてから訳すよう指導する。前半二句と後半二句に分けて、指名した生徒に訳を発表させる。誤りを正して訳を完成させる。
❺「発問例」に沿って意見を出させ、まとめる。
❻全体のまとめともなる部分なので、「発問例」に基づいて発問し、生徒の間で討論させ、まとめる。
❼押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一四九ページ

問 **「秋風」（1行目）を受ける動詞を詩中から三つ抜き出せ。**

答 至・送・入

問 **「蕭蕭送二雁群一」（第二句）というのは、具体的にどのような情景か。**

答 「（秋風が）もの寂しい音を立てて雁の群れを送ってゆく」ということだが、実際には、秋風に乗って雁の群れが渡ってゆく情景をいっている。

補 秋風は、北または北西の方角から吹いて来る。雁は、秋になるとその風に乗って、北から南へ渡ってゆく。それを、秋風が雁の群れを送ってゆくと捉えている。そこに詩人の感受性のみずみずしさと、風や雁という自然物への優しさが見えることに注意する。

問 **◉「入二庭樹一」（第三句）の主語は何か。**

補 **答** 秋風。

秋風が庭の樹木に吹き入って来て、寂しい葉音を立てたのである。秋風の吹いてきた様を、「入」という動詞で捉えていることに注意させたい。「揺」（揺ラス）や「当」（当タル）など別の動詞を用いることも不可能ではないが、それでは秋風の静かさ・かそけさを捉えきれない。誰も気づかぬうちに庭の木の中に「入」ってきて、葉ずれの音をさせる、その秋風のひそやかな吹き方が、みごとに捉えられている。

問 **「蕭蕭」（第二句）はどのような音の形容か、次の中から選べ。**

(ア)重苦しい音　(イ)寂しい音
(ウ)明るい音　(エ)軽快な音

答 (イ)

問 **なぜ「孤客」（第四句）が最も先に風の音を聞いたのか。**

答 予想される答えの例。①一人旅をしていて孤独だったために、前夜からよく眠れなかったから。②孤独だったために神経がとぎすまされ、かすかな風の音に最初に気づいたから。③一人きりであまりにも寂しいので、どんな音でも聞こうと聞き耳を立てていたから。

右のような例が考えられるが、自由に、想像も含めて、意見を述べさせたい。右のような範囲ならばいずれも正答といってよいが、②のような答えならば、他の意見も包括できよう。また、この詩を作者の実体験と結びつける必要はないが、王叔文・柳宗元らと政治改革を行おうとして失脚・追放され、各地を転々とした人生の体験を、ここで背景として紹介してもよい。

語句の研究

● 一四九ページ

1秋風引　秋風のうた。「引」は、「うた」の意。「引」とは、もともと楽府（漢代から歌われた民間歌曲）の題に用いられ、「行」「曲」「歌」「吟」などと同じように「うた」の意を表す。

2何処秋風至　どこから秋風は吹いて来るのか。「何処」は、場所を問う疑問詞。「どこから」「どこに」「どこまで」などの疑問の意を表す。訓読では「何レノ処ヨリカ」「何レノ処ニカ」などと、疑問の係助詞「カ」を付けて読むので、呼応する動詞の結びは連体形となる。

2蕭蕭　もの寂しい様子や音の形容。ここでは日本語の「さらさら」「ざわざわ」「ひゅうひゅう」などに当たる、風の音、または風が木の葉を鳴らす音を形容した擬音語。同じ漢字を二つ重ねて物事の状態を表す擬態語・擬音語を、「畳語」または「重言」という。

2雁群　雁の群れ。「雁」は、カモ科の大形の水鳥で、秋には北から南へ渡ってゆき、春には南から北に帰る。従ってここでの

問 **「孤客最先聞（モニク）」（第四句）について、**

1 「孤客」とは具体的には誰のことですか。

2 「孤客」と対応し、孤独感をいっそう強めているものは何か。

3 「最先聞（モニク）」のは何か。

4 「最先聞（モニク）」ことができたのはなぜか。

5 ここには「孤客」のどのような心情がうかがわれるか、次の中から一つ選べ。

(ア)郷愁　(イ)慕情　(ウ)旅愁　(エ)哀愁

答

1 作者

2 雁群

3 秋風の音（秋の訪れ）

4 孤独なわびしさから敏感になっていたから。

5 (ウ)

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

「雁群」は、おおよそ北から南へと飛んでいることになる。

3朝来 今朝がた。「来」は、漠然とある時点を指す。またある時点から物事が続いていることを示す。後者で解釈するならば「朝来」は「朝から」の意となる。

3入二庭樹一 庭の樹木に吹き入る。秋風が庭の木々に吹き入って葉ずれの音をさせたことをいう。

3孤客 独りぼっちの旅人。孤独な旅人である私。「客」は、旅人、旅客。「客」の音は、漢音では「カク」、呉音では「キャク」と読むが、旅人の意を表すときには漢音の「カク」を用いることが多い。

3聞 ききつける。（無意識のうちに）ききとる。意識してきく場合には「聴（チョウ）」（聴）を用い、意識せずにきく場合には「聞（ブン）」を用いる。「聴」は、日本語の「きく」に当たり、「聞」は、日本語の「きこゆ」「きこえる」に当たる。

鑑賞

「江南春」とは対照的に、この詩はすべての句に動詞があり、起句から転句までは最初に提示された「秋風」が主語となっていく。結句に至って「孤客」が「秋風」を聞くというように主述が逆転するが（「春暁」の主語が最初から知覚主体である作者であったことと比較してもよい）、主題を読み取るのは難しくない。

だが、結句で初めて転句までの情景を描写していたのが誰かが明らかにされ、「何処」という意外の思いが「孤客」と結びついていることが示されたり、「送」や「入」のような動詞の主語に「秋風」を置くことで、「孤客」が「秋風」によって喚起された思いを暗示したりなど、その表現の技巧は細密で精緻と言ってよい。

また、「今朝がた庭の木に」という具体的で身近な時間と場所が転句で描かれたことで、結句の「孤客」の焦点化が自然となされていることにも注意が必要であろう。それゆえ、「最先聞」という結びが、作者の孤独と憂愁を結晶のように表現することに成功しているのである。

江雪

柳 宗元

作者

柳宗元

七七三年～八一九年。中唐の詩人。字は子厚。自然描写に優れ、散文では古文復興を唱えた。河東（山西省永済県）の人。貞元九（七九三）年、劉禹錫らと共に進士に及第。秘書省校書郎、藍田県尉などを経て、貞元十九（八〇三）年、監察御史裏行に就任。皇太子李誦（後の順宗）のもとに政治改革を実現しようとしていた王叔文・王丕らの党派に参加した。貞元二十一（八〇五）年、順宗の即位とともに礼部員外郎に任ぜられたが、王叔文らの急進的改革は旧勢力の抵抗にあって挫折し、クーデターにより在位七か月で順宗は退位、憲宗が即位して永貞と改元されるや、王叔文らは処刑され、柳宗元は永州（湖南省零陵県）司馬に貶された。元和十（八一五）年、長安に召還されたが、あらためて柳州（広西壮族自治区柳州市）刺史に左遷され、同地で死去した。柳州に流されるときには、朋友の劉禹錫が、老母がいるにもかかわらず播州（貴州省遵義県）に流されるのをあわれみ、任地の交換を願い出た。信義と友情に厚い人柄を示すエピソードである。静かな自然詩に優れ、清らかでときに厳しい叙景の中に、悲憤と思索を秘めている。唐代を代表する自然詩人として、王維・孟浩然・韋応物と並んで「王孟韋柳」と称される。また韓愈と共に古文復興運動を進めて散文を革新し、唐宋八大家の一人とされる。「柳河東集」四十五巻がある。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「江雪」は五言絶句の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首３」（目加田誠著）によった。

主題

鳥の姿も人の気配もない雪景色の中で、蓑笠をつけた老人がただ一人、釣り糸を垂れている。厳しい自然の美しさと、それと一体となって生きている人への共感を描いたもの。

構成

第一（起）・二（承）句…生き物の気配の全くない雪景色。
第三（転）句…第一・二句でうたわれた景色に一人の老人がいることを浮かび上がらせる。
第四（結）句…老人が釣り糸を垂れたまま、静かに雪景色の一部となってゆく。
〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言絶句。　押韻―「絶」（第一句）・「滅」（第二句）・「雪」（第四句）。入声八・屑韻。
対句―第一句・第二句。

訓読と現代語訳

①千山　鳥飛ぶこと絶え
②万径　人蹤滅す
③孤舟　蓑笠の翁
④独り釣る　寒江の雪

① 多くの山々から、鳥の飛ぶ姿は絶え、
② 全ての小道から、人の足跡は消えている。
③ だが一艘の小舟に、蓑と笠をつけた老人が、
④ ただ一人、寒々とした川の雪景色の中に、釣り糸を垂れている。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。その際、第三句の表現効果に注意する。
❺ 作者と、この詩の成立の背景について理解する。
❻ 対句表現について理解する。
❼ 第四句を中心に、作者が雪景色から感じたものを考える。
❽ 詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶歴史的仮名遣いに注意して、「江雪」「孤舟」「蓑笠」などの読み方を確認させる。
❷内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹第一句と第二句の「対句」表現で、辺り一面に全く生き物の気配がないことが強調されていた。そこに第三句で「孤舟蓑笠翁」と、命ある人間がいたことに気づく驚きが生まれる。厳しい自然の中で「孤舟」に身を託している漁翁の威厳にも注目させる。こうした点に注意させ、現代語訳をさせる。

展開

❺作者柳宗元と、作詩の背景について、「作者」に基づいて、簡単に説明する。次の点に触れる。
(a)「秋風引」の作者劉禹錫と同年に進士に及第し、友人どうしだった。
(b)王叔文の政治改革に参加し、劉禹錫ともども、熱心に改革に取り組んだ。
(c)永貞元（八〇五）年、クーデターにより改革派は失脚し、王叔文らは処刑されたが、柳宗元は永州（湖南省零陵県）に左遷され、のちには柳州（広西壮族自治区柳州市）に移されてそこで死んだ。
(d)「江雪」詩は、永州左遷時代の作である。

❻(a)「対句」とは何かを、指導者側で説明し、板書して確認する。

《板書例》
「対句」＝構成が同じで、意味内容も互いに対応する二つの句。
(b)第一句と第二句が対句を形成していることを理解する。
(c)両句の対応を考えさせ、板書して説明する。

《板書例》

「対句」
- 千山（場面）／鳥飛（主語）／絶（述語）
- 万径（場面）／人蹤（主語）／滅（述語）

このほか、「千」と「万」の数字の対比、「鳥」と「人」の生命の対比、「絶」と「滅」の動詞の対比や、その動詞が合わさって「絶滅」という一語となること等に注目させてもよい。

絶句形式には対句は必要ではないが、この詩では厳しい自然の情景を重厚に描くために用いられていることを理解させる。

❼ (a) 第一句と第二句は、自然描写。この「叙景」（自然描写）は、まるで生命を拒否しているような厳しいものである。そこに自然の厳しい美しさがある。

(b) しかし第三句で、そういう自然の中にも、「孤舟」に身を託して漁をする老人が提示される。その姿は孤独だが、厳しい自然の中にあって、威厳を持っている。

(c) 第四句で、その老人が雪景色の中でじっと釣り糸を垂れているさまが描かれ、雪景色が威厳に満ちた小さな生命を包み込む自然として捉え返され、厳しい中にも自然と人間（「翁」）とが一体となって終わる。

❽ 詩形・押韻について確認させる。特に、押韻について、「絶」「滅」「雪」と、厳しいイメージをあたえる語が韻を踏むことによってより強調されていることに注意する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶【四季】の詩について、まとめの学習活動を行う。
思判表B⑴ア・イ・オ　主態　〔「言語活動」1〕
ア季節の景物と心情の関わりについて、理解する。
イ複数の心情によって詩が構成される場合があることを、理解する。

❶ア…四首の詩について、その詩の中で象徴的な景物の表現を抜き出す。表現の単位は、「春暁」であれば「春眠」「不覚暁」のように、詩の意味の切れ目になっていることが望ましい。この機会に、詩の意味の切れ目について考えさせることも一つの方法である。一首の詩について、複数の表現を生徒に選ばせ（指導者による選択でもよい）、その表現が呼び起こす心情や表現相互の関係について説明する。

イ…詩の結びにおかれた心情と、それとは異なるものの、詩の世界を構成するには不可欠の心情に注意する。たとえば「春暁」であれば、風雨によって花が落ちることが春を惜しむ心情の描写として結びとなっている。一方で、春の朝寝の耳に聞こえた鳥の声には、自然を楽しむ心が託されている。そうした例を説明しながら、「江南春」における「鶯啼」と「煙雨」が同様に複層的な関係にあることにも気づかせる。

【評価】「言語活動」1を行い、それぞれの詩の内容を的確に捉え、季節と心情の関係について理解しているか、またそれぞれの詩を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

● 一四九ページ

問 **対句になっているのはどの部分か。**

答 第一句（起句）と第二句（承句）。

補 対句とは、構成が同じで、意味内容も互いに対応する二つの句であることを事前に説明し、そのうえで質問する。

問 **対句になっている第一句と第二句から、どのような様子が分かるか。**

答 「千山」「万径」という表現から、見渡す限り全ての場所が浮かび、そこから「鳥飛」「人蹤」が全て「絶」「滅」している、生命の気配の全くない様子。対句であることによって、その光景が鮮明になる。

補 さらに、「千山」が大きい景色であるのに対して、「万径」が足もとの小さな小道であること、「鳥飛」が鳥の飛ぶ姿であるのに対して、「人蹤」が人の姿ではなく、その足跡であることなどを理解させる。

問 **第一句・第二句の二句はどのような世界を描いているか、適切なものを次の中から選べ。**

(ア) 厳冬の静寂の世界。
(イ) 全て死滅した世界。
(ウ) 人跡未踏の世界。
(エ) 夜の静寂の世界。

答 (ア)

問 **第三句・第四句について、**
1 **「蓑笠翁」とは、(1)どこで、(2)何をしている様子か。**
2 **[難][A]「蓑笠翁」のどのような姿が描かれているか。**
[中][B]「蓑笠翁」のどのような姿が描かれているか、適切なものを次の中から選べ。
(ア) 広大な自然の中で悠々自適の生活をする姿。
(イ) 静寂の中でじっと孤独に耐える姿。
(ウ) 厳しい寒さの中で懸命に獲物を追う姿。
(エ) 厳寒に身を置く、清閑孤独な姿。

答 1 (1) 雪に覆われた人気のない川で、(2) ただ独り釣り糸を垂れている。
2 A 厳寒に身を置く、清閑孤独な姿。
B (エ)

問 **前半の二句では命の気配がなかったが、後半の二句では「翁」が現れている。前半と後半には、どのような対比があるか。**

答 前半は厳しい雪景色の美しさを描いているが、後半では、その厳しい自然の中で自然と一体となって生きる人間の、静かな生き方が示されている。

補 ことに、転句（第三句）で、「孤舟蓑笠翁」と、命ある存在が現れる鮮やかな展開に注意し、結句（第四句）で、それが雪景色の

語句の研究

● 一四九ページ

4 江雪　川辺の雪景色。寒々とした人気（ひとけ）のない川の雪景色。第四句の「寒江雪」と対応している。

5 千山　多くの山々。周り中の山々。「千」は、具体的な数ではなく、数が多いことを示す。第二句の「万径」と対応している。

5 鳥飛　鳥が飛ぶこと。鳥の飛ぶ姿。「鳥飛（てうひ）」と一語として読んでも、意味は同じ。

5 絶　たえる。やむ。なくなることをいう。

5 万径　全ての小道。「万」は、具体的な数ではなく、数が多いことを示す。第一句の「千山」と対応している。「径」は小道。深い山あいなので、大きい道はない。

5 人蹤　人の足跡。

6 孤舟　ただ一艘だけの舟。

6 蓑笠翁　蓑と笠をつけた老人。「蓑笠」は、カヤ・スゲなどの草の茎で作った雨具。「蓑」は体につけ、「笠」は頭にかぶる。「翁」は、老人。ただここでは「漁翁」の意と考えられる。「漁翁」は、漁父（ぎょほ）・漁夫・漁人などと同類の言葉で、魚をとって暮らしを立てている人、つまり漁師（りょうし）の意。

中にとけこんでゆくことを理解する。

問 ◉**「蓑笠翁」（第三句）とは、誰のことか。**

答 作者、柳宗元自身のこと。

補 雪景色の中で釣り糸を垂れる「漁翁」の姿から詩人の孤独な心情が読み取れる。

問 **この詩の表現の特色として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)音楽的　(イ)触感的
(ウ)絵画的　(エ)嗅覚的

答 (ウ)

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

その場合、「翁」は年長者または年長者と見える人への敬称に近く、必ずしも老人でなくともよい。

6 寒江雪　寒々として人気のない川の雪景色。

鑑賞

詩題と前半の対句によって壮大な雪景色を現前させ、後半ではそれとは対照的に小さな老人が独り釣りをしているさまに焦点を合わせる。「孤舟」は老人の換喩であり、その孤独を示してはいるが、「秋風引」の「孤客」とは孤独の質が異なるようであり、孤高とも言うべき存在であるかに思われる。それは、壮大な雪景色を背景としつつ、埋もれることも抗うこともしないその自然な姿が示すものではあるが、一方で、『楚辞』以来の伝統である「漁父」のイメージの系譜によって、俗世に対峙する存在であることが示唆されることも見逃せない。伝統的なイメージの系譜が漢詩の表現に不可欠であることをこの段階で生徒に理解させる必要はないが、例えば釣り人のイメージについて自由に発言させるなどすれば、太公望やスナフキンなどへの連想も生徒の側から出てくるかもしれない。そうしたところを糸口として、漢詩文における「漁父」のイメージについて紹介することができれば、この詩の世界を理解する助けになるであろう。

また、水墨画における点景のように置かれた老人は、たしかに作者の自画像ではあるが、それが俯瞰的な視線から描き出されていることも重要である。それによって、読者はそこに作者の姿を見ると同時に、読者自身もその立場に身を置いて心情を想像することができるようになる。これは、絵画における点景人物に類似した役割をもっていると言えるだろう。